

その他

見て楽しむから活用して楽しむ，地域に根ざした学校緑化の実践
～たからじまフラワーパーク 4年目の取組～

十島村立宝島中学校 教諭 戸崎 寿彦

【推薦のポイント】

- 本論文は，隆起サンゴ礁の島である宝島の土壌の改良を基盤とした緑化活動について，4年間にわたる研究・実践の過程が積み上げられた，優れた論文です。
- たからじまフラワーパークの実現を，児童生徒の豊かな心の育成・教育目標の具現化・地域に開かれ，地域と一体となった教育活動の展開など，緑化活動を広い視野からとらえた取組で，緑化活動と関わることによる児童生徒の変容の姿も的確に表現されており，価値ある内容です。

目 次

1	はじめに	1
2	研究主題	1
3	研究主題設定の理由	1
	(1) 地域の実態から (2) 学校の実態から (3) 児童生徒の実態	
	(4) 本研究のねらいと仮説 (5) 研究構想図	
4	研究の実際	2
	これまでの取組	2
	(1) 土壌の改良 (2) 花の選定 (3) 栽培中の花の紹介	
	(4) これまでの花壇の様子 (5) 花を生かした活動 (6) 卒業式の飾り付け	
	(7) コロナワクチン集団接種 (8) 給食調理員さんへの感謝の気持ち	
	仮説①の実践	5
	(1) 中学3年生による花づくり (2) 花手水の製作	
	(3) 卒業式・入学式の装飾 (4) 小学校卒業の日のサプライズ	
	(5) 花を使っでの染め物	
	仮説②の実践	7
	(1) 社会教育学級の実践 (2) 施設への花の提供	
	(3) 港への花植え (4) 自宅での花の栽培	
5	研究の成果と課題	9
	(1) 成果	
	(2) 課題	

1 はじめに

本校に勤務して4年目となった。赴任当初、花壇には花よりも雑草が多く、入学式で飾る花もわずかな量であった。緑化担当を拝命した当初、多くの職員や、地域の方々から「宝島では花は育たないよ。」と何度も言われた。以前勤務した学校は年間約5万本の花を栽培するなど緑化活動に力を入れており、全国の緑化コンクールでも受賞する学校であった。そこで6年間緑化担当をした経験をこの宝島で生かし、「1年中花いっぱい为学校にしよう。」と心に誓った。

3年間の取組で、学校を花いっぱいにすることに成功した。しかし、学校だけではなく、島内も花いっぱいにして、宝島をもっと自然豊かな素晴らしい島にしたいという気持ちが日に日に強くなっていった。

2 研究主題

見て楽しむから活用して楽しむ、地域に根ざした学校緑化の実践
～たからじまフラワーパーク4年目の取組～

3 研究主題設定の理由

(1) 地域の実態から

宝島は鹿児島市の南西36.6km、奄美大島から北西90kmの位置にあり、面積7.14km²、周囲約13.77km、人口131人のトカラ列島最南端の有人島である。島の中心にある女神山は、聖地として木々の伐採が厳しく禁じられ、山麓部から山頂部にかけてタブノキ、ビロウ、ウバメガシ林という森林の変化がよく保存されており、トカラ列島の森林相を良好に留めている植物群落として貴重であるため、2012年に国の史跡名勝天然記念物に認定された。

気候は亜熱帯性気候で、雨季が長く、台風、大雨、そして強風の影響を受けるため、塩害や根腐れ、草丈の高い植物の茎が折れることが多い。また、夏は病害虫の被害も多く、冬は北西の季節風の影響で荒天の日が続く、緑化活動を展開するに当たっては非常に厳しい環境下にある。

島内にはいたる所にハイビスカスが植えられ、ほぼ1年中花が咲いている。また、テッポウユリやグラジオラス、スイセンなどの球根類や、ツワや菜の花が自生し四季ごとに咲きほこっている。しかし、各家庭を見ると、土壌が粘土質であることから、花壇に花を植えたりプランターや丸鉢で育てていたりする家は、ごくわずかである。

(2) 学校の実態から

本校ではこれまで、新卒の臨時的任用教員が、赴任したてで緑化担当になることが数年続いていた。担当者の緑化経験がほぼ皆無のため、花壇の土は痩せて硬く、水はけの悪い状態になっていた。土置き場に置いてあった土も同様に、赤土が9割以上含まれており、植物の生育には不向きなものであった。

運動会や文化祭は、児童生徒だけではなく島内全員が参加して行われる。それ以外にも、フットサルやバレーボール、卓球といった社会体育や、島の伝統にもなっているスチールパンの練習など、島民が学校を訪れる機会が多い。また、十島村が行っている「7島めぐりツアー」の観光ルートになっているなど、島に観光に来た際には必ずと言っていいほど学校を訪れているが、そのような中であって学校の花は乏しい現実にあった。

(3) 児童生徒の実態

本校の緑化活動は、毎週火・木曜日の掃除時間に行う外作業、隔週金曜日の8時15分から15分間に行うグリーンタイム、每学期1時間の創意の時間等である。それぞれの活動では、種まきや耕運、土づくり、定植など、花の栽培に関する作業は一通り行うことができる。それ以外にも、総合的な学習の時間で落花生栽培を行うなど、土に触れる時間は非常に多い。

児童生徒の中には、不登校や親の事情など、様々な事情により山海留学生制度を利用して他県か

ら転校してくる者も多く（現在全校児童生徒23人のうち、9人が山海留学生）、慣れない環境の中でストレスを感じていることもある。

(4) 本研究のねらいと仮説

本研究では、学校花壇を「たからじまフラワーパーク」という名称で呼び、学校緑化を充実させ、「花は見るだけでなく、触って楽しむもの。」というコンセプトのもと、花を使った活動を意図的に取り入れることで、児童生徒の情緒を育む。また、学校が緑化のアンテナ局となり、活動することで、地域の花づくりの活性化につながることを主たるねらいとする。

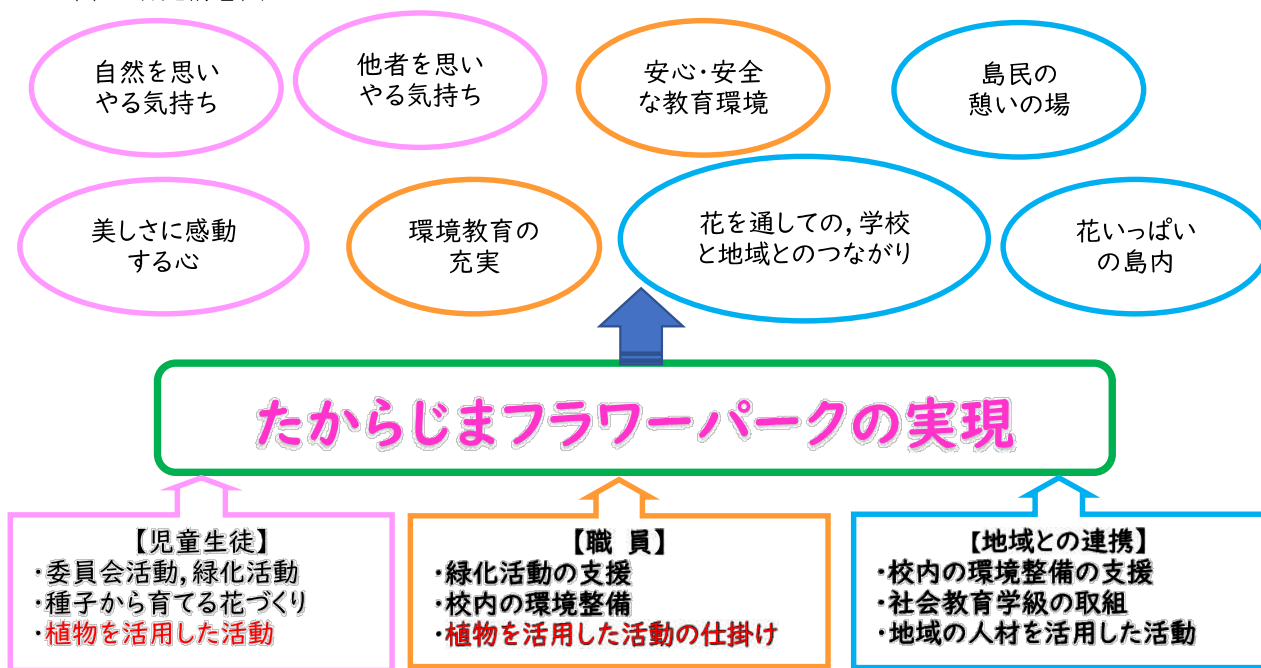
【研究仮説①】

学校生活の中で、「花を使った活動」を意図的に取り入れることで、児童生徒の情緒を育むことができるのではないだろうか。

【研究仮説②】

学校がアンテナ局となり緑化活動を推進することで、地域の花づくりに対する意識が高まり、花いっぱいのさらに魅力ある島になるのではないだろうか。

(5) 研究構想図



4 研究の実際

これまでの取組

(1) 土壌の改良

赴任当初の花壇は、数年腐葉土や堆肥が入った様子はなく、水はけが悪く、硬い土壌になっていた。一度に全ての花壇を変えることは、予算的にも厳しかったため、今後植え替え時期に腐葉土・堆肥を投入することで、よりよい花壇に向上する見込みのある状態にすることとした。学級園から始まり、職員室前花壇と少しずつ改良し、今年度は最後の花壇である図書室前花壇と体育館前花壇の改良に取り組んでいる。土の状況は非常に悪かったため、10cmほど取り除き、新しい土を入れている。これまで改良した花壇には、定植時に腐葉土・堆肥を入れ、土が固くなることを防ぐために、苦土石灰ではなく、有機石灰を継続して使用している。そのため、年々水はけ



【数年前の花壇の様子】

がよく、柔らかい土壌に変化している。

土置き場の土は、ほぼ赤土であったため、1・2年目は市販の培養土と混ぜながら使用し、3・4年目は、使用済みの土に、腐葉土・堆肥・ボラ土（小粒）と混ぜ合わせながら培養土を作っている。仮植用の用土と、定植用の用土は以下のような目安で配分している。

	仮植用	定植用
春蒔き	使用済み土：腐葉土：ボラ土：堆肥 3.5 : 2.5 : 3.5 : 0.5	使用済み土：腐葉土：ボラ土：堆肥 4 : 2.5 : 1.5 : 2
秋蒔き	使用済み土：腐葉土：ボラ土：堆肥 4.5 : 3 : 2 : 0.5	使用済み土：腐葉土：ボラ土：堆肥 3 : 3 : 2 : 2

使用した土は、土置き場の右側に入れ、左側では、ふるいにかけて使用済みの土に腐葉土などを入れ混ぜ合わせる場所に作り替えた。また、土置き場の横は、以前まで草置き場になっていたため（現在は別の場所に移動）、状態の良い基本用土が出来上がっていた。そして、この場所の横にはガジュマルが植えてあるため、大量の落ち葉が発生する。そこで、この場所の土を今シーズンの基本用土として使用する分を取り除いた後、落ち葉と米ぬかを混ぜ合わせ、腐葉土を製作している。ただしシートをかぶせるなどの管理が難しいため、1年後に使用できる状態になればよいと考えている。



【土置き場の様子】



【腐葉土作り】

(2) 花の選定

花を選定する際に気を付けていることは以下の4点である。

① 宝島の気候にあったもの

これまで栽培してきた花については、蒔いた日や気温、病虫害の有無、栽培場所の違いによる生育の違いをリストにしてまとめている。宝島で初めて栽培する種類については、蒔き時期をずらし、生育場所を数か所に分けて成長の様子を比較し、翌年度以降の栽培に活かしている。

② 普段見かけない色

サルビアであれば『赤』、マリーゴールドは『黄色』『オレンジ』というように、それぞれの花にはオーソドックスな色がある。本校では、サルビアであれば白やピンクなど赤以外に計7色、マリーゴールドは、気温によって色味が変わる2品種を含む計6色、ビオラは、混合種も含めて15色を育てている。特に、地域住民や学校職員が、「こんな色初めて見た。」と驚くことが多い。



③ 色の配色

児童生徒は、学校生活や家庭生活の中でストレスを感じがちである。学校で最初と最後に見る風景は、花壇の花であるため、パステルカラーを基調とした柔らかい色合いや、リラックス効果のある青色の花（ブルーサルビア、ビオラ、ムスカリなど）を意図的に取り入れた。

④ 差し芽で増やせる植物

自然環境により、苗が育たないことがある。そのため、補植ができるよう差し芽で増やせる植物を取り入れることで、花がない状況が少しでも回避できるようにしている。（ポチュラカ・マリーゴールド・アリッサム・チェリーセージ等）

(3) 栽培中の花の紹介

児童生徒玄関横，理科室入り口には，春まきと秋まきの花の名称と写真を掲示している。これにより児童生徒は咲いている花は何という名前なのかを確認することができる。



(4) これまでの花壇の様子

【春花壇】



【夏花壇】



(5) 花を生かした活動

児童生徒は定期的に花を摘んでいるが，その花を利用して，様々な物を製作している。押し花にした後ラミネートしたしおりや，掲示物の飾り付けに利用している。また，職員が花を水に浮かべて展示していたものを写真に撮り，その画像をコースターにした。この作品は，連日噴火が続いている同じ十島村の諏訪之瀬島小中学生に向けて作られたものである。



【コースター作り】

(6) 卒業式の飾り付け

これまでお世話になった3年生を、花いっぱいの中で卒業式を盛り上げたいという、中学1・2年の男子生徒の気持ちを汲み、式場の花のセッティングを任せることにした。配色や高さを考えながら、試行錯誤すること約2時間。納得のいく配置を考えることができた。会場の飾り付けが終了後、小学6年生・中学3年生が下校したことを確認し、サプライズで、体育館から教室までの花道の飾り付けを行った。



【中3教室への廊下】



【レイアウトの様子】

(7) コロナワクチン集団接種

十島村ではコロナワクチンの集団接種が行われた。多くの医療従事者の方が七島を巡って来てくださるということで、感謝の気持ちを込めて、会場入り口に生け花を飾った。テッポウユリとグラジオラスは、宝の森に咲いているものである。医療従事者の方々にとっても喜んでもらうことができた。



【医療従事者への感謝の花飾り】

(8) 給食調理員さんへの感謝の気持ち

これまで用務員や給食調理員として約30年間、本校のために尽くして下さった方が、3月末で退職されることになった。卒業式の花道を見て、「私もこんな花道を歩いてみたい。」と漏らしていたため、最後の日に、花道を作って見送りを行った。恥ずかしそうにしながらも、とても喜んでくださっていた。



【勤務最終日の花道】

仮説①の実践

(1) 中学3年生による花づくり

花の選定をする際、どの花壇にどのような種類の花を植えてみたいかカタログを見ながら生徒に考えさせ、その意見を参考にしている。その中で、中学生にとって一つの伝統になっている植物がある。3年前に、「高さ3m以上になるヒマワリを育ててみたい。」という中学生の言葉からスタートして、今年で4年目。台風の影響や、日当たり等の条件でなかなかうまく育たなかった。

また、卒業式の花道を、「自分たちが育てた花で埋め尽くそう！！」という取り組みが3年目に突入した。今回は練習を兼ねて、春まきでメランポジュームの種まきを行い、正門前のメイン花壇に植え付けた。中学3年生の2人は山海留学で今年度転校してきたが、これまで花を育てた経験がなく、また学校にもなかなか行くことができなかった。その2人が育てた花が、学校の一番目立つ場所で咲きほこっている様子を見て、自分たちの存在意義、そして自信を持つ一端になったのではないと思う。秋蒔きでは、「花道を白色と水色で埋め尽くしたい。」ということで、ピオラを2色栽培している。現在各色200本ずつ育てているので、順調にいけば20m近くの花道をプランターで埋め尽くせるのではないかと、日々の成長を楽しみにしている。



【春・秋の種まき】

(2) 花手水の製作

切り戻した花を水に浮かべて飾ったところ、児童生徒・職員にとっても好評だった。作品を見た当時小学5年生が、自分たちも作ってみたいとのことだったので、任せることにした。PTA や学校行事等で来校される方がいらっしゃるときや、出張で島を離れていた先生が戻ってくる日に、自主的に製作し、年間で20作品作っていた。今年はそれを見ていた小学2・3・4年生が自分たちも花手水を作ってみたいと言ってきた。そこで、先輩が指導しながら制作を行っていた。



【校長先生お帰りなさいメッセージ付き】

【小2・3・4年生初めての作品】

(3) 卒業式・入学式の装飾

本来地域住民も出席する本校の卒業式・入学式だが、コロナの影響のため保護者のみの参加となり、寂しい式典となっている。そこで、会場を花いっぱい埋め尽くそうと考え、式典用に約1500苗を準備した。正面には「サクラソウ・ペチュニア・ビオラ」の3種類を配置したが、ビオラ（白色・黄色）は、中学3年生の2人が育てたものである。マーガレットを約40鉢準備していたが、満開になっていなかったため、一部を体育館入り口に飾っている。

入学式では、卒業式に間に合わなかったマーガレットが満開になったが、サクラソウは気温が高くなったため枯れたものも多く、一部を使用した。正面は上からペチュニアとマーガレットを交互に配置し、花道は白と水色をベースにし、すき間なくビオラを配置している。卒業式と比べると、満開を迎えているものも多く、見ごたえのある会場となった。

会場の入り口には、児童生徒、職員だけでなく、地域住民の方からのメッセージによる桜を製作した。木の幹は、美術関係の仕事の経験がある保護者に依頼し、製作してもらった。



【卒業式会場正面】



【花道】



【会場入り口 メッセージで満開になった桜】

(4) 小学校卒業の日のサプライズ

小学生の卒業式は中学生に合わせるため、小学6年生は卒業式以外に、「卒業の日」がある。複式で一緒に過ごした5年生が、「最後の日を華やかに送りたい。」という気持ちから、教室前を花で飾り付ける企画を考えた。卒業の前日の放課後、6年生が下校した後に、5年生2名と3名の職員で、校内にあるすべてのプランターと丸鉢を集め、飾り付けを行った。翌朝その光景を目にした6年生の児童・担任は、満面の笑みを浮かべ、とても喜んでくれていた。



【小5・6年生、たんぼぼ学級前のサプライズ】

(5) 花を使っての染め物

約100年前まで宝島の着物に使われていた芭蕉布を、島バナナから取り出して繊維にし、新しい産業として活動されている方がいらっしゃる。その方からマリーゴールドで染色をしてみたいと相談があったため、切り戻しをした際の花を提供したところ、きれいに帽子が染め上がった。染め上がるまで時間や手間がかかるため、簡単にはできないが、校内の花と地域の人材活用の視点で、授業に取り入れることができないか検討している。今年度3学期の子ども会の活動及び授業（図工・美術の時間を利用）の中で取り組む方向で計画を進めている。



【左：染色前】【右：染色後】

仮説②の実践

(1) 社会教育学級の取組

社会教育学級では、「花いっぱい、宝島の土づくり」講座を開いた。実際どのような用土を使い、配合の割合をどのように変えているのか、実践を踏まえながら講義を行った。普段よりも多

くの方が参加して下さった他、忙しくて来られなかった方から、「資料をもらえないだろうか」という問い合わせも多くあった。

また、社会教育学級の一環で、年2回島民の方々への花苗の配布を行っている。以前、配布後の各家庭の花の様子を見て回ったところ、



【社会教育学級】



【花苗の配布】

、水はけの悪い土で肥料があまり入っていないことに気が付いた。そこで、花苗だけではなく、製作した培養土、化成肥料も提供し、日当たりや花がら摘み、考えられる病虫害とその対処法についてもレクチャーするなど、より長く楽しんでもらえるような手立てを行った。

(2) 施設への花の提供

島民や観光客が集まる「コミュニティーセンター」「郵便局」「診療所」「友の花温泉」、そして普段から交流のある子育て支援拠点施設「いまきら園」や小規模多機能施設「ホームたから」に、年2回花の苗を配布して飾ってもらっている。途中で花が枯れた場合、学校に苗が余っていたら補植を随時行った。

また、子育て支援拠点施設いまきら園の式典を飾る花は、学校で栽培した花を飾ってもらっている。式前日の準備で職員が花を選びに来るが、どの花を使おうか迷いながらも、会場を埋め尽くす様子を想像しながら楽しそうに持っていく姿がとても印象的であった。



【上：診療所 下：売店】

(3) 港への花植え

11月に行われている子ども会活動「港の清掃」の中で、待合所入口の花壇への花の植え付けを行った。現在宝島では、2人のアーティストによる壁画プロジェクトが行われている。そこで、より一層明るい前籠港にしようということで、これまで雑草が生えていた花壇を耕し、花の植え付けを行った。

しかし2週間後、パンジーは残っていたが、ノースポールは全て枯れていた。葉が黒くなっているところを見ると、塩害の可能性が考えられる。今後、この場所でどのような植物を育てることができるのか試しながら、同時に土壌改良を行い、今後の活動につなげていきたい。



【定植と2週間後の様子】



【新しく完成した壁画】

(4) 自宅での花の栽培

教員住宅は島のメインストリートに位置し、地域住民だけではなく、来島している業者さんなど多くの方が歩いて家の前を通る。学校は集落よりも高い場所にあり、特に高齢者の方は学校の花壇を見に来ることが難しい。そこで、自宅の通り沿いを花壇にし、「アネックス たからじまフラワーパーク」と命名し、四季折々の花を植えている。

畑作業をしていると、通りかかった地域住民の方が、「きれいだね」、「これ何て花?」「次は何を植えるの?」と声をかけてくる。中には、「この前もらった花元気ないけどどうすればいい?」と聞いてくる方もいるので、その時は自宅まで行ってアドバイスをを行っている。



【自宅花壇】

5 研究の成果と課題

(1) 成果 (ア～ウは仮説Ⅰ, エ～キは仮説Ⅱに関連)

ア 植物に触れる機会が増えたことで、児童生徒が様々なことに気が付くようになってきている。例えば、草置き場にツルコザクラ (春) マリーゴールド (夏) コスモス (秋) が同時に咲いていたり、ハウセンカの実の中から発芽しているものを見つけたりするなど、普段なら見逃しそうな発見をする児童生徒が増えている。



イ 昼休みなどに外で作業をしていると、児童生徒がよく声をかけてくれる。以前までは「何をしていますか?」だったが、「これは何という花ですか?」と変化してきた。今年は「これは〇〇ですか?」と名前を覚えていたり、「去年は〇〇に植えていましたよね?」、「これペチュニアですよ?大好きなんです!!満開になるのが楽しみです。」などと、花についての知識だけでなく、処分の為引き抜いた苗を家に持ち帰って冬越しさせようとしたり、種子を持ち帰り翌年自宅で蒔いたりする児童生徒も増えてきている。

ウ 宝島島内一周駅伝では、待機している間小3・4年生の2人が、自分たちのところにタスキを持ってくる小2のために、近くに咲いていたツワの花を道路に並べて、「ここまでがんばれ!!」という思いを伝えていた。



【中継所を飾り付ける児童】

エ 保護者が来校した際、「花がたくさん咲いてきれいですね」と、よく声をかけてもらえるようになった。また、社会教育学級の花いっぱい運動後には、「花の様子がおかしいけど、どうすればいい?」と尋ねてくる地域の方も増えてきている。

オ 毎学期実施している学校評価に、「花と緑にあふれたきれいな学校になっている」という項目がある。学校緑化に力を入れ始めた令和元年度から3.8の高評価を得ており、令和2年度1学期の3.9、令和3年度3学期の4.0と更に良い評価をもらった。しかし、令和4年度はこれまでと同様、3.8という評価であった。

	1学期	2学期	3学期
H30	3.4	3.4	3.4
R01	3.8	3.8	3.8
R02	3.9	3.8	3.8
R03	3.8	3.8	4.0
R04	3.8		

花の量、質ともに向上させてきたが、卒業式・入学式の時期の満開の様子を基準にすると、やはり評価は低くなると思われる。そして、なによりも、花がたくさんあることが当たり前になり、今よりももっとたくさんのお花でいっぱいにして欲しいという期待の現れが、このポイントになっているのではないかと考えている。

カ 自宅で花を育てる家庭も増えてきており、売店には土や肥料、プランターなどの園芸資材が販売されるようになった。また、これまでは野菜の苗の注文のみであったが、今年から花の苗の注文が可能になり、今後より多くの方が花を育てていくものと思われる。

キ 花が会話のきっかけになり、普段交流のない高齢者の方と会話をする事が多くなった。最近では、出来た種をお裾分けしたり、めずらしい色のハイビスカスの差し木や株分けした夜香木、畜産をしている方から牛糞を頂いたり、花を中心として交流が増えてきている。

(2) 課題（ア～ウは仮説Ⅰ，エ～キは仮説Ⅱに関連）

ア 花に興味をもつ児童生徒が増え、花を使った様々な取組を行っているが、全員が行っているわけではない。中には興味はあるけど、活動するきっかけをつかめない児童生徒もいるのではないかとされる。来年度は、4月と7月に児童生徒がタブレットで校内の花の写真を撮り、PTAで保護者が来校した際、素晴らしい作品に投票をしてもらう「たからじまフォトコンテスト」の実施や、その作品を文化祭で展示するなど、児童生徒全員ができる取組を行いたい。

イ 現在花手水用の器が一つしかなく、好きな時にいつでも製作ができない状況である。また、学校にある花瓶は数が限られ、しかも大きく重い。来年度に向けて、各教室に花手水用の器と、児童生徒が取り扱いやすい大きさの花瓶を準備することで、児童生徒が自由に花を使って飾り付けることができるのではないかと考えている。

ウ 児童生徒だけでなく、職員も積極的に花づくりに参加してほしいと考えている。そこで、学級園に植える花については、種まきや仮植、毎日の灌水などの全ての管理を学級に任せ育ててもらおうと考えている。そのためには、まず職員が基本的な栽培スキルを身に付ける必要があり、職員作業を活用して取り組んでいきたい。また、花の選定については、作りやすい品種をこちらから提示し、レイアウトも含めて考えてもらう。

エ 前籠港の花壇は塩風の影響を受けるだけでなく、土壌そのものの塩分濃度が高い状況であった。また、灌水を毎日することができない。今後土壌改良や、塩害や乾燥に強い植物の選定を進めていく必要がある。

オ 公園やコミュニティーセンターには以前設置した木製のプランター枠が置いてある。しかし現在では木材が朽ち果て使用できない状況となっている。今後自治会と相談しながらプランターの設置を進めていきたい。

カ 地域住民の方の花が枯れる要因として、天候に合わせた花の置き場所や病虫害に対する対処方法が考えられる。社会教育学級などで啓発活動をする必要性を感じている。

キ 地域住民の方が来校する多くのタイミングは、学校行事があるときだけである。そのため、満開時期がずれてしまうことが多い。そこで、人が集まるコミュニティーセンターや売店などに、「たからじまフラワーパークからのお知らせ」のような掲示をすることで、より多くの方が花を見るためだけに来校してくれるのではないかと考えている。

